

卒業論文要旨

入間台地西部の 地理学的考察

40年度秋元君子

調査地域である入間台地とは狭山丘陵と加治丘陵とに南北を限られた扇状地状の地域で行政区画的には、所沢市三ヶ島村と狭山市入間村、武蔵町、豊岡町及び同藤沢村を含む地域である。地形的には多摩面、下末吉面、武蔵野面、立川面、後閑東ローム段丘面 α 、 β 、及び沖積面の各面に分けられると考えられる旧多摩川の隆起扇状地である。各面の分布状況は諸文献におけるものとほぼ一致しているが、後閑東ローム面 α と名づけた旧多摩川の旧河道にみられる面は諸文献においては立川面としている点のみ異なる。これはこの面において、円れきが表層のロームに混入してみられるので私としては、この面を後閑東ローム段丘面と判断したためである。この地域は洪積台地が大部分を占めるために地下水が低く自由地下水面深度が10m以上の地域が大部分を占めている。そのため江戸時代になる前からある古い集落は狭山丘陵縁辺及び加治丘陵縁辺の地下水の浅い地域に集中し、台地中央部及び旧多摩川の旧河道である不走川沿の集落の大部分は江戸時代以後に開発された新田集落でその開発は地下水の条件の良いもの程古い。上述のように本調査地域における集落の分布は地下水による影響が非常に強いが位置的には不走川沿に一系列と、所沢と扇町屋を結ぶ道路沿に一系列みられ、この点で交通路による制約もかなり大であると考えられる。

本地域は豊岡町が農業経営土地率が40%であるのを除いては70%以上であり、農家率も豊岡町が22%であるのを除いては60%以上である。すなわちこの地域に於ては豊岡町が都市的性格をもっているのに対し他の三ヶ村は農業的色彩が濃い。又兼業率特に二種兼業率が県平均、全国平均に比して高い。又豊岡町への人口集中の傾向がみられる。

この地域の農業は東京の近郊農業的色彩が濃く、農産物販売額の52%を畜産物、野菜で占めている。この地域における土地利用をみると全農業経営土地の17%が山林75%が耕地となっている。耕地の内65%が畑35%

が樹園地でこの地域にはほとんど水田のない事が特色となっている。これはこの地域が大部分洪積台地からなっていて、水が乏しい事が主な原因である。畑作物として大きな面積を占めるものとしては麥類が第一でこれは冬作物として作付けられるためであるが近年冬の出稼におされ、又工場用地等による耕地の減少により減少しつつある。その他種穀いも類等も多いがいずれも減少の傾向にある。野菜はこれに対して、1950年に比して29%の増加をみせており、この内根菜類が69%をしめている。又根菜類は1950年に比して49%増となっている。これはこの地域には関東ロームが分布するため土壌が深く、根菜類に適しているためである。樹園地としては桑と茶が主なものである。

茶の歴史は古く鎌倉時代明慧上人によって植えられた川起茶に起源をもつといわれ、江戸時代地の利を得て繁栄にむかい、その後明治の横浜開港によって非常に盛んになったがオ二次大戦に禍され、大打撃を受けた。しかしその後復興し現在量的には戦前をしのぐ程になった。しかしこの地域の茶業は手工業的な色彩が濃く全国的に見ても埼玉県の茶生産高は6位、静岡県が圧倒的に多く産するので国際商品としては流通していない。しかし品質は良く価格は宇治茶に次いで2位である。

各町村別に栽培面積をみると豊岡町に31%三ヶ島村、藤沢村で21%入間村で23%（全耕地に対する割合）が茶園である。この茶園は本調査地域の耕地の24%を占めるが、この地域の茶園は、畦茶園の多いのが特色で、全茶園の31%を占める。この畦畔茶園は畑の防風の役割を果たし従って丘陵等防風の役割をするものから遠い三ヶ島村では特にその茶園に占める割合が大となっている。またこの地域の農家の87%は茶を栽培しているが、特に三ヶ島村では91%にも達しているのは上述の様なことに起因するところ大であると思われる。本調査地域に於ける生葉生産量をみると、三ヶ島は収穫面積は全体の40%近いのに意外に少く、豊岡町に次いでオ二位である。（以下、藤沢村入間村の順）又、質的にも王露を産しない等少し落ちる傾向にある。又工場の規模も四ヶ町村中豊岡町が最も大で、三ヶ島は工場数の多い割に規模が小さい。すなわち豊岡町における茶業は商業的色彩が強く三ヶ島村におけるものは副業的色彩が濃い。この傾向は茶の製産物販売額における位置にもはっきり見られ、豊岡町のある武蔵野町では、茶の粗収益は製産物粗収益の9%を占めるのに対し三ヶ島村の属する所沢市では5%、すぎない。他の二ヶ村の内、藤沢村は豊岡町に準じ入間村は三ヶ島村に準ずる。